

博物館の現状とミュージアム・マネージメント学会

日本ミュージアム・マネージメント学会副会長

斎藤報恩会自然史博物館専務理事

斎藤 温次郎

右肩上がりの砂上の楼閣で、世紀末の特徴とも言える様なバブル経済がはじけてから数年になりますが、生涯学習施設のシンボルともいえる博物館が、年々増加しています。極論すると豪華絢爛な見せ物的傾向の強い施設や、資料不足を複製の展示でカバーし集客のみに力を入れているように見える館もありますが、それだけに多数の多様化した博物館のあり方が改めて問われ、変革を求められています。特に、自由奔放とも思われるほど多様性のある、あらゆる階層の利用者の知的要求に応えられる博物館の経営はどうあるべきか、重要な課題となってきました。

この様にきびしい状況に応えるべく、ミュージアム・マネージメント学会はあらゆる分野からの参加を得て設立され、去る3月には第1回の大会が開催されました。学会のあるべき活動方針、行動計画の具体化として設置された各研究部会も、この6月から本格的な活動を開始し、会員の報告や実地の見学を題材にした活発な討論によって第一步を踏み出しています。その活動内容は1997年3月の第2回大会で報告されるものと思いますが、学会の設立の趣旨の通り、ミュージアムを中心としながらも社会の幅広い分野の会員の方々のためのマネージメントの勉強、討論の場として、それぞれの会員のおかれた社会的立場を背景に忌憚のない討論がなされることでしょうか。多様な個性を発揮していただいて学際的に領域をこえて討論され、今後のミュージアム・マネージメント学会の方向やあるべき姿などを鮮明にしていいただければと願っています。

博物館の変革の時期にあたり、従来の個性のない博物館の経営から21世紀型の顔の見える博物館に脱却する時であり、この学会も将来は海外の各種博物館との交流を通して世界にも発信できる学会へと発展していくことを視野に入れて、今後の活動のあり方を検討していく必要があると考えます。21世紀型の創造と発見の知的情報学会にするマネージメントの確立の場として、会員相互のあくなき討論の実践の場として、研究部会における研鑽と、第2回大会における研究発表に期待する次第であります。

2年度以降の新しい目標の模索と学会の一層の充実を期しています。



C · O · N · T · E · N · T · S

■博物館の現状とミュージアム・マネージメント学会／日本ミュージアム・マネージメント学会副会長 斎藤報恩会自然史博物館専務理事・斎藤温次郎	1
■第2回大会のご案内	2
■ミュージアム文化研究部会／部会長・沖吉和祐	3
■制度問題研究部会／部会長・島津晴久 幹事・小川義和	4
■理論構築研究部会／幹事・守井典子 幹事・岡田純一	5
■事業戦略研究部会／幹事・斎藤恵理	6
■ソフトサービス研究部会／幹事・重盛恭一	8
■投稿ご自由 侃々諤々／書評	10
■会員からのメッセージ	13
■研究部会の開催予定一覧 ■INFORMATION ■編集後記	16

「大会」開催の日程決まる

—いまからご参加の準備を！—

昨年度の第1回大会「ミュージアムがつくる新しい文化」には150名を超える会員の方に参加いただき、成功のうちに終了することができました。

今年は会員の皆様にご協力いただき、「みんながつくりあげる大会」を目指して、充実した内容にするよう事務局で準備をすすめています。

是非ご出席くださいますようお願い申し上げます。

1 日 時 3月8日(土)、9日(日)

2 場 所 国立科学博物館新宿分館 研修研究館

東京都新宿区百人町3-23-1 (JR山手線 新大久保駅下車 徒歩10分)

3 趣 旨 (案)

- ①ミュージアムがどういう未来をつくるか参加者に提案してもらう
- ②ミュージアム・マネージメントの実践を報告してもらう
- ③ミュージアム・マネージメント学の構築を行う
- ④多くの人々にミュージアムの可能性とミュージアム・マネージメント学の重要性を喚起する

4 内 容 (検討中)

●シンポジウム (パネルディスカッション)

「パラダイムの転換とこれからのミュージアム」

●フォーラム

将来のミュージアムやミュージアム・マネージメントについてひろい視野から話し合い交流を深める

●懇親会

●研究発表と協議

●見学と研究協議

※遠方より参加される方のために、宿泊場所をご紹介します。

宿泊を希望される方は、**1月10日までに事務局へ**お申し込み下さい。

○新宿サンパークホテル 6,500円 (シングル室料)

(大会会場隣り 最寄り駅：JR山手線大久保、総武線大久保)

○国立オリンピック記念青少年総合センター 4,000円 (シングル室料)

(大会会場まで約30分 最寄り駅：小田急線参宮橋)

ミュージアム文化研究部会

文化創造メディアとしてのミュージアム

1. 研究の基本姿勢

近年の大きな社会状況の展開は、人々の生活意識、国や地方の施策、企業の事業などに大きな影響を及ぼし、顕著な変化が認められる。

こうしたなかで、各地で様々な形の博物館が生まれ、また、博物館の活動にも大きな変化の兆しが見られる。

「ミュージアム文化研究部会」では、今後、①ミュージアムは、どのような文化を創造・発信できるか、②地域の文化（まち）づくりにどのように関わっていくか、という視点にたって研究を進めていく。

2. 当面の研究課題

①資料（情報）の収集、整理、研究、展示などの博物館活動にあたっての来館者（利用者）や地域住民と博物館との関係、②地域の伝統の継承、自然の保全、文化の創造といった地域的な課題に対する博物館の関わり、③地域全体を博物館化していくための多様な資源の統合化などについて、検討を行っている。

当面、実践的な事例を中心としたケース・スタディのなかから、何らかの普遍性を見つけだす試みを進めている。

3. 来館者と博物館の協同関係

第2回、第3回部会は、上記①を念頭において、現代美術に関する特徴的な活動を続けてきた『セゾン美術館』、参加体験型展示の一つの草分けとなった『国立科学博物館』の実践を観察した。

セゾン美術館の「あそびじゅつ」は、「子供たちが自分の意見をもって作品を鑑賞できるように」との目的を持つ。現代美術を通して子供たちの感性を育み、21世紀のベースを作ろうという意識が感じられる。作品の選定、配置は美術館が行うが、最小限に絞られた展示解説や、様々な角度から作品に迫れる空間構成は、来館者それぞれの美術展を創造できる可能性が大きい。

国立科学博物館の「たんけんフロア」では、子供たちが自然の感触や科学の不思議を体験できる。配置された標本や装置に直接触れ、動かし、観察する。子供たちの活動を「それとなく」支援するボランティアの存在は、博物館と利用者とのインターフェイスとして重要である。国立科学博物館では、「キット」を準備し、学校や公民館での科学活動の支援を行っている。博物館の活動を広げる観点から、また、地域の科学（文化）活動を高める観点から、注目された。

また、両館とも、カフェとミュージアムショップを備えている。これら施設は、我が国では博物館の付帯

的機能と考えられてきたが、様々なグッズを通して、自然に博物館活動を拡大し、人々の科学的・文化的関心を広げる上で有効である。そのため、質の高い（信頼性のある）グッズの開発（共同開発）の必要性が指摘された。

セゾン美術館は「収蔵作品を持たない」というメリットを生かし、固定概念に捕らわれず時代に相応しい展示の企画に努力しており、国立科学博物館は、所蔵する膨大な標本・資料の持つ潜在力を如何に展示や事業に反映していくかという課題を抱えている。いずれの場合も、活動を支える人材の育成とネットワークの形成の重要性を共通理解した。

4. これからの取り組み

これまで3回の研究会で、「体験」の捉え方、一次資料とメディアの利用の生涯学習体系、情報の活用（データベースの整備、ネットワーク化）、周辺環境を含めた博物館の整備、地域と一体となった運営などについて再整理するとともに、「歴史と事実を伝え考える博物館」に加え「文化を創り広める博物館」を考えていくことが示されている。

今後、上記2の課題の、②地域的課題への関わり、③地域全体の博物館化についてのケース・スタディを深めるとともに、ミュージアムに関する理念を実際の経営に反映する試みを行うなど、ミュージアム文化の展望をしていきたい。

（部会長・沖吉 和祐/北海道大学事務局長）

研究会開催状況

7月7日 国立科学博物館
9月16日 セゾン美術館
11月17日 国立科学博物館

今後の予定

1月11日・12日
かわらミュージアム（近江八幡）
滋賀県立琵琶湖博物館

その後 大学博物館を予定

制度問題研究部会

第2回 研究部会報告

第2回制度問題研究部会は、21名が参加し下記の通り開催された。

日時：平成8年10月12日（土）午後2時～5時

会場：国立科学博物館 大会議室

前回の研究部会では日本の博物館制度の現状についてお茶の水女子大学の鷹野光行教授から報告があり、わが国の博物館制度（特に学芸員制度）についていくつかの問題点が明らかになった。本研究部会としては博物館法を含めた全体的な制度の検討についても視野に入れつつ海外の博物館制度の現状についても検討することとなった。

第2回研究部会ではアメリカにおける博物館の制度等に詳しい山本珠美氏（東京大学大学院教育学研究科）に話題提供をお願いした。「NPOとしてのミュージアム」というテーマでアメリカの博物館制度の現状及びその成立過程、歴史的・文化的背景についての話があった。

まず、アメリカにおける博物館はスミソニアン研究機構に属する博物館も含め経済的、社会的にも政府組織から独立したNPO（Non-profit Organization, 非営利組織）の範疇にはいる。例えばスミソニアン研究機構の国立自然史博物館（National Museum of Natural History）のNationalの持つ意味が日本のいわゆる「国立」とは異なることを再認識させられた。このような理解のもとに以下のような内容の話があった。

1. NPOの定義と特徴について

博物館は、第1セクター（政府組織、地方行政組織、公社、公団等）や第2セクター（民間の営利部門等）ではない第3セクター（非営利部門）に属する。

2. 博物館の組織について

博物館には、館の経営管理の最高決定機関である理事会がある。無給であるにもかかわらず、理事会のメンバーに選ばれることは名誉なこととされ、コミュニティの市民により構成される場合が多い。

有給スタッフは、専門性のある職員から成り、キュレーター、エデュケーター、レジストラ（資料登記職員）、コンサーバター（資料保存専門職員）、デザイナー、アドミニストレイター（事務職員）等である。

またボランティアの存在も大きい。

3. 財源について

博物館に対しては、税制上の優遇措置がある。博物館運営のベースとなるのは、個人、企業、財団等による寄付、政府援助、ミュージアムショップ、出版等の商業活動による収益で、なかでも個人による寄付が多いようである。

4. マネジメント上の問題点について

個々人の私的なニーズではなく、社会的なニーズをいかにとらえるか。また非営利組織という性格上、サ

ービスへの対価は求められない。経済的に成り立っていくためには、社会的な存在意義を市民にアピールし市民の支援を喚起していかなければならないといった問題がある。

最後に山本氏の研究テーマでもある多文化主義（multi-culturalism）の流れを受けた博物館の運営事例や、スミソニアン航空宇宙博物館の原爆展論争についての話もあった。



このように、アメリカの博物館の制度といっても、とうてい一言では言い表せないものであるが、短い時間の中で巧みに紹介していただけたのではないだろうか。

スミソニアン原爆展論争のように、市民が望む博物館像と博物館側とのずれが大きな問題を引き起こし、それが国民的な関心事になるといったことは、日本ではとても考えられないことである。博物館が政治的、社会的な影響を及ぼしうる存在であることが窺われる。一方、ヨーロッパではConsensus Conferenceという流れもあり、博物館と市民が互いに影響を与え合うことの社会的な意味が、従来にも増して重要になってきている。このような状況の中で日本の博物館は何を目指すべきなのか、博物館の使命に関わる問題を今後も問い続ける必要があるだろう。

本研究部会としては、引き続き海外の博物館制度や博物館事情について知識を深め、日本の博物館制度を再検討していく方向が確認された。今回十分に議論できなかった博物館職員の養成のことも含め、次回はイギリスの制度をテーマにして研究部会を開催することとなった。

（部会長・島津晴久/（財）千葉県社会教育施設管理財団、
幹事・小川義和/国立科学博物館）

第3回 制度問題研究部会

日時：平成8年1月25日（土）午後2：00～

会場：国立科学博物館

テーマ：イギリスの博物館制度と人材養成について

報告者：竹内有理

理論構築研究部会

1. 第1回研究会

日 時：9月28日(土)14:00~17:00

場 所：国立科学博物館特別会議室

参加者：25名

ほかの研究部会が2回、3回と会合を重ねる中、ようやく開催される第1回目の研究会ということで、予想を上回る大勢の方にご参加いただいた。

まず、高安部会長から、この研究部会の長期的な運営計画や当面の活動テーマなどについて、会報(No.2)に掲載した内容の確認の意味を込めて、簡単に説明があった。

今年度の研究テーマは、「ミュージアム・マネジメントのパラダイム研究」である。具体的な方向としては、新しい運営形態を持つ各種施設の立場から従来の博物館概念を捉え直すことや、博物館関連の諸団体からミュージアム・マネジメントに対する意見を聞き社会の動向を踏まえた理論構築の足掛かりとすることなどを考えている。

とはいえ、第1回目である今回は、とりあえず参加者から理論構築に関するいろいろな意見を出してもらうこととし、その契機となるような話題提供を当学会の会員である川津尚一郎氏((株)博報堂)にお願いした。

川津氏は、展覧会やイベントなどの企画実施に携わってきた「門外漢」であることを自認しつつ、自身がこの夏に関わった国立科学博物館の事業「サウンド・オブ・サイエンス」に関する感想と、博物館の「作品化」という現状への懸念などを述べられた。(「サウンド・オブ・サイエンス」の内容については、直接の担当者であり、この研究部会の幹事でもある塚原氏より説明があったが、ここでは割愛させていただく。)

川津氏によれば、今日の博物館は、存在としては地方自治体の首長、また建物としては建築家の「作品」と化している上に、中身の構成はプロデューサーが行い、展示物はデザイナーやアーティストが担当し・・・と「作品」の寄せ集めのような形になっているという。博物館は、そのような静的(スタティック)な完成品であるよりも、動的(ダイナミック)な運動体であって欲しいというのが川津氏の意見である。作品化してしまった博物館を、道具として効果的に役立てるためには、やはり「人」がきちんと介在することが重要なのではないかと指摘もあった。

会の後半は、質疑応答の形をとりながら、参加者全員に意見や感想を述べてもらった。「人」の重要性については、参加者からも同じ意見があったほか、施設や事業の運営(特に財団法人の財政面)に話題が集中した。ただ、理論構築そのものに切り込むには時間が不足し、いろいろなことが消化不良のままになってしまった感否めない。

研究部会の運営に当たる側としては準備不足を反省し、次回以降はもっとテーマを絞り、もう少し専門的な内容で行う必要があるのではないかと考えている。

(幹事・守井典子/国立科学博物館)

2. 第2回研究会(講演会)

テーマ：非営利組織における自己評価法

講師：田中弥生氏

(笹川平和財団プログラム・オフィサー)

日 時：10月5日(土)14:00~16:00

場 所：国立科学博物館

参加者：27名

講演内容は、田中さんが翻訳されたP・F・ドラッカー『非営利組織の自己評価法』(ダイヤモンド社)をベースとして、非営利組織(以下、NPO)とは何か、どのようなものが挙げられるかにはじまり、NPOの経営の特徴と、それに相応しい自己評価の方法などを中心に展開されました。

NPOには利潤というバロメーターが存在しないので、そのマネジメントがうまくいっているかどうかを測るには、組織の内部の人間が、組織の本来の使命(ミッション)に立ち返りながら「効率」や「効果」を検証する自己評価という手法が適しているそうです。実際には、8名ぐらいの比較的同じような立場の人間が集まって、ファシリテーター(利害関係のない第3者が望ましい)のもとで、数日を費やししながらワークシートを用いて行ふとのことでした。

日本でも「NPO」という言葉が一般的に用いられるようになってきましたが、翻訳者ご本人の説明ということで、大変分かり易く、参加者も満足されたのではないのでしょうか。誌面が限られておりますので、内容については、上記の本を直接ご覧頂ければ幸いです。

博物館はNPOに含まれますが、博物館利用者にとつての「利益」は何かという視点を考慮しながら、ミュージアム・マネジメント理論の構築を目指していきたいと思います。(幹事・岡田純一/青山学院大学大学院)



事業戦略研究部会

事業戦略研究部会は、「企業博物館に事業戦略を学ぶ」というテーマのもと、視察を中心とした活動を行っている。9月14日に行われた第2回の部会では、愛宕山の「NHK放送博物館」を訪れた。

当日はあいにくの雨模様であったが、19名もの参加者があり、遠くは北海道から駆けつけた会員の方もいた。

◆まずは館内見学。リニューアル間もない展示を観覧

現在の放送博物館は、1996年にリニューアルオープンしているが、案内をして下さった方は、リニューアル前からこの博物館で学芸業務に携わり、リニューアル時にもたいへんご尽力をなされたという河野氏であった。

エントランスには、日本初の本放送が行われた「J O A K東京放送局」の建築模型が、シンボリックに展示してある。これは、かつてこの愛宕山に建っていたものである。ここを抜けると、2階へと続く階段の手前に、そのスタジオが再現されており、そこには70年以上前のマイクが展示されている。このマイクは現在も健在で、来館者が自由にアナウンスできるようになっている。その対面には、初期のテレビ実験の展示があり、こうした日本の放送の黎明期を物語る展示をプロローグに、来館者を2階へと導く。

強制動線で、放送70年のあゆみを時系列を追いながら辿れる構成となっており、時代ごとに活躍したテレビやラジオが当時の映像や音を再現している。また、お茶の間風景など、各時代のラジオやテレビをとりまく

典型的な庶民の姿が、ユニークな紙粘土細工で表現されていて、これらが庶民の目からみた時代性を物語りながら、サイン的な機能も果たしている。

河野氏の言によれば、リニューアル前は疲れやすい展示であったので、その点を改善することに力を注ぎながら、改装計画にあたったという。例えば、聞くもの、見るものは、全て2分以内の演出に抑えたり、いつでも中断できるストップ機能を持たせて、次の人に直ぐ対応できるような配慮も、その結果だ。また、所々にめくり式の解説装置があり、より詳しい情報を知りたい人に対するサービスも忘れていない。コーナー毎の、門構えのようなデザインは、一目でコーナーの括りが分かる目印となっており、その下に立つと、超指向性スピーカーによるコーナー解説が聞けるようになっている。

このように、随所に来館者の立場にたった展示の工夫がなされていて、長年の活動実績があるからこそできる、改装ならではのきめ細やかさを感じた。

この放送博物館は、年代もののテレビやラジオ、シナリオ原稿等が豊富に収蔵されており、館が誇る貴重な実物資料となっているが、もう一つの貴重な実物資料として、映像や音声そのものをあげることができる。8月の時分になると、「玉音放送」を聞きに訪れる人が多くいるというが、このことは、音声の資料的価値の高さをまさに物語っている。

3月のオープンからの入場者数は50,508人で、前年度比36%増しという。さらに、滞留時間も長くなったということである。





◆松本館長から、NHK放送博物館の事業活動を聞く

放送博物館は、昭和31年3月、世界初の放送博物館として誕生した。時代は高度経済成長期の真っ只中、新しいものが次から次へとできていくなかで、古いものはどんどん棄てられていく時代となっていた。放送博物館が誕生した背景には、こうした状況のなかで日本の成長プロセスが分からなくなってしまう、という危機があったという。

「資料の収集が一番大切ではないか。」と松本館長は語っていたが、事実、放送博物館は、資料収集にたいへん力を注いでおり、「ビンテージラジオの基地」といえるほどのコレクションを有している。ラジオ収集にかけては世界一を誇る。反省点としてはハードばかりでなく、ソフトにも着目するべきだったという。ラジオやテレビは、新しい時代のものほど資料がないということだが、これは少し意外な感じがした。悩みの種としては、こうした膨大な資料を保存するスペースが不足しており、現在、東京、浜松、鶴岡の3ヶ所に分けて保存している。保存スペースの問題は、公立民間を問わず同じようである。

こうしたラジオ等の実物資料にくわえ、これまでNHKが収録してきた膨大なソフト資料もある。将来の夢としては、こうしたソフトを検索してすぐに見られるようなシステムを構築したいとのこと。また、玉音盤は、現存13枚中7枚を収蔵しているとのことだが、レコードの保存技術は世界にもなく、現在研究を依頼しているという。

このように、資料収集に重きを置き、貴重な資料が豊富に収蔵されていることから、さぞかし運営費が高くついているのではないかと想像したが、予想外に慎ましい予算であった。その限られた予算のなかでどのように資料収集を行っているのか。これがユニークで、NHK本体の職員やOBによって資料収集委員会を組織して全国のNHKやOBにアンテナを張りめぐらし、

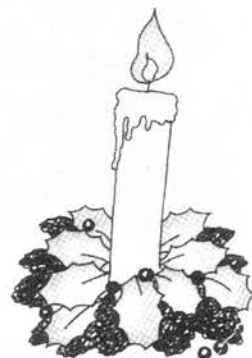
「ハードはもらう、ソフトは借りる」の方針のもと、積極的に収集活動を進めているとのことであった。

NHKは、この放送博物館の他に渋谷の「スタジオパーク」という展示施設を設置しているが、ここの差別化は、「スタジオパーク」が若者を中心とした大衆向けを狙っているのに対し、この放送博物館は、成人や年配の方を対象にした、やや専門性の高い生涯学習系の施設を目指している。集客への取り組みとしては、教育委員会や旅行社へのはたらきかけを行っているが、これまでの実績から考えると、一番の集客要因は口コミであるという。

また、地域との関わりを大切にしたいという考えから、カラオケセットをホールに設置したり、会社員に対する昼休みのテレビサービスなどを行っている。

その他、調査研究、企画展の開催、学芸員研修の受け入れ、来館者に対する対応等、若干十数名のスタッフで精力的にこなしており、大きく感服させられた。

(幹事・斎藤恵理/株式会社文化環境研究所)



ソフトサービス研究部会

第1回研究部会

「事例見学：ソフト・サービスの現場を見る」1996年9月21日 土曜日 13:30~17:00 ユネスコ村 大恐竜探検館

●所沢の丘陵地に響く、ユネスコ村への熱きエール●

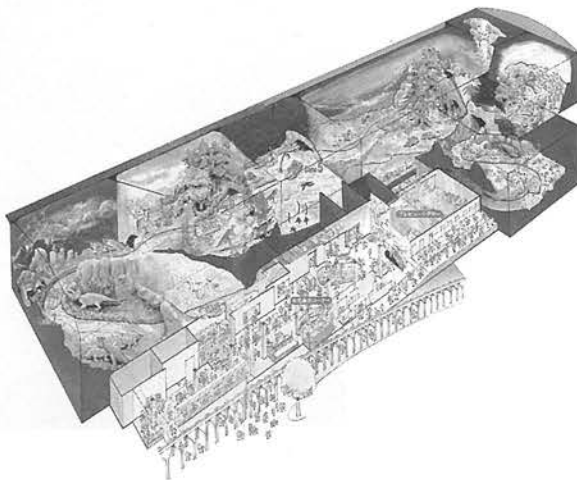
1996年9月21日。台風の影響でいまでも泣き出しそうな空模様の中、西武球場の隣、ユネスコ村を訪れた。悪天候にもかかわらず、総勢16名の参加を得た。

今回の研究部会の訪問は、1993年（平成5年）に開館して3年経った大恐竜探検館を、より以上に発展させたいと願うユネスコ村の諸氏が、JMMAへ「是非ともご意見を！」と、ラブコールしたことにはじまる。展示にふれて、そして、シミュレーションも体験して、じっくりと見せていただいた施設に、参加者たちから、がんばれユネスコ村！と、熱きエールがおくられた部会であった。

●まずは、日本版ジェラシック・パークへ！●

ユネスコ村は、昭和26年、(社)ユネスコ協会連盟の協力を得て、西武鉄道株式会社が設置した。そのむかしは、世界各国の民家や建造物が並ぶ野外公園だった。東京に住む子供にとって、必ず一度は学校や子供会で訪れる場所だ。実は今回、20年以上ぶりで訪れ、その変わり様に、たいへんに驚かされてしまった。

まずは、その大変化の最たるモノ・大恐竜探検館を、西武鉄道の徳重氏、小野氏、田中氏にご案内いただく。展示空間は、大きく4つに分かれている。



地球生命の歴史をCGで見せる「プレビューシアター」に始まり、船のライドに乗って水路を走りながら、原寸大でリアルに動く恐竜の世界を見るメイン展示、そして、化石展示のコーナーと、ユネスコについて知らせ、時にイベントも行うユネスコ学習室から成る。化石展示コーナーの続きには、ミュージアム・ショップもしっかりある。恐竜をネタにしたオリジナルグッズがすごく豊富で、うれしい。

何よりも圧巻だったのは、やはり、Zone-1からZone-7までの、動く恐竜の展示だ。水の中から首長龍が、岩陰からティラノサウルスが、残虐そうな姿をスッと現わす。アミューズメント性豊かな演出は、大人もワクワクさせる日本版ジェラシック・パークだ。

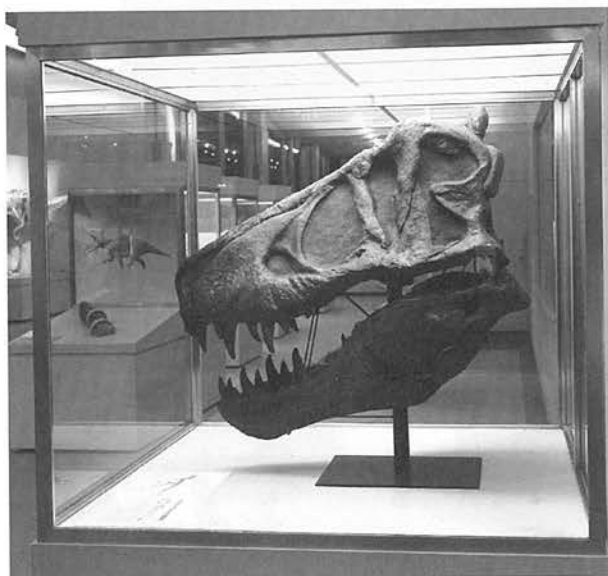
この膨大に予算をかけ、優れた演出の施設を、これ以上どうしたいとマネジメント側の諸氏は考えているのかと、いぶかしい。

●オープン3年目に迎えた、大いなる選択のとき●

見学後のディスカッション。西武鉄道から、オープン3年経った同館では、このまま、アミューズメント施設でいるか、博物館・科学館の方向性を追求するか、それが今大きな課題になっていることが報告された。平成5年12月にオープンし、本年まで約3年経過した大恐竜探検館の入場者数変化についても、データに基づく報告があった。

オープン翌年度はさすがに、90万人を越す入場者が集まった。だが、平成7年度には63万人に減った。

この年は、大恐竜探検館以外の施設として、UFOが設置されたため、ユネスコ村全体の入場者数は118万人に達しているが、単館としては憂慮すべき事態。平成8年8月までの推移を見ると、前年度のラインで終始しそうな危機感があると言う。ライドシステムの固定的な展



示、陳腐化しやすい資料展示、テーマと直接かかわらなくなってきたユネスコの学習室をどうするか。リピーターの少なさなど、その課題は多いし、大きいと…。

参加者からは、「8年度で安定しはじめたというのは、かえって好ましいのではないのか？」という疑問も投げかけられたが、つねに前を見る姿勢の同館は、そこに止まらない。その先を目指している。こうした民間経営の姿勢には見習うべきだろう。多くの公立館でも、オープン3年目で、入館者が増えるか減るかというボーダーとなる時期を迎えると聞く。往々にして、日和見になるものだが、これを大いなる選択の時と踏まえるあたり、さすがだし、本当に切実なのだと思う。

●望まれる、ソフトサービスによる事業展開●

ユネスコ村は、大恐竜探険館の他に、シミュレーションシアター、メリーゴーランド、UFOなどの遊戯施設がある。これだけの施設を、実数19名のスタッフと、それぞれの時期や曜日で増えるアルバイトスタッフで動かしている。

もちろん、学芸員はおらず、恐竜に関する入場者からの質問には、館の中できちんと答えられない。外の専門家に問い合わせるという。

展示場内で利用者を誘導する制服のスタッフはアルバイトである。展示解説は、イベントの中でやらせたこ

ともあったが、好き嫌いで一生懸命やる人と、やらない人が明らかだったようだ。

開館以来、恐竜ファンの層が多い子供をターゲットに、毎月何かのイベントや展覧会、3D映像の特別放映等を行って集客策を練るが、継続性もなかった。今最大のネックは、子供を中心としたリピーター確保にあるのに、だ。それを実現するために、ライドシステムの恐竜展示以外-化石展示コーナーやユネスコ学習室を活用して何かを行いたい希望もある。しかも、人手不足の中で…。ここには、まさに、人によるソフト・サービスをきちんと行うことが望まれている。

●参加者からおくられたエールの数々●

これらについて参加者からは、さまざまに大恐竜探険館への期待と意見があがった。全てではないが、ここに、その一部を列挙しよう。

・「ライドを降りて、化石展示室に移る部分に気持ち

の切り替えのできる空間が欲しい。例えば、記念写真を撮れるコーナーがあってもいい」。

・「化石展示の方に力を入れてみてはどうか？」

・「恐竜ファンは多く、実によく恐竜について知っている。その力を借りて、例えば、恐竜博士を募集して、子供のボランティアとしてもいい」

・「こういった施設には、専門的な学芸員は必要なのではないか。むしろ教育普及担当者が必要だ。」

子供たちに何かを教えるという態度ではなく、子どもたちの情報から、館に望まれていることを吸収することもできる」

・「国内にも恐竜をテーマにしたり、実物などを持っている博物館も多い。いずれかと姉妹館になり、協力体制を確立すれば、ひろがりも出ると思う」

・「私の勤務する館では、テーマに関するどんな小さなことも“話題”と考え、毎月1回、どんな新聞に、

どんな記事でもいいから採り上げられるような働きかけの活動を、楽しみながら行っています。そして、月1掲載を、実現しています。広報を積極的にしないというお話しですが、簡単な努力で実施できるので、是非とも行ってください」

・「日本では、恐竜に関する大発見は少ないが、2ヶ月に1回ぐらいは、全国各地で何らかの中・小の発見が新聞を賑わせているのではないのか？それらのニュース

をリアルタイムで、簡単に掲示や展示をする仕組みがあれば、恐竜マニアのみならず、一般の恐竜への興味を増すことも出来ると思う」

・「アミューズメントか博物館かという選択の中で、カナメとしての学芸員の必要性が話題にのぼり、有意義であった。恐竜というテーマを教育を伴って伝えるスタッフが、やはり必要でしょう」…など、など、多くの方々から、熱いエールをいただくことが出来た。これらは、たしかに大恐竜探険館におくられた応援の言葉ではあるが、それぞれご発言いただいた方々が、日頃自館の運営で考えたり、外から博物館に接する中で感じていたことだと思う。

大恐竜探険館の将来像を語り合う中で、それぞれの関わる館のソフト・サービスのあり方を垣間見、模索することができたのであった。

(幹事・重盛恭一／トータルメディア開発研究所)



投稿ご自由

侃々諤々

皆さんで考えるコーナーです。ご意見をお寄せ下さい。

伊賀の地域創造と“芭蕉さんの夢” アミュージアム構想による「ミュージアム文化」

高島 博

1. はじめに

～グレイター I G A 古典文化芸術の館（やかた）センターの新構想～

筆者は、郷里伊賀上野に新しいタイプの「I G A 古典文化芸術の館（やかた）センター（仮称）」という新構想を実現したい。伊賀には観世親子が生まれ、能楽創座の地も伊賀である。俳聖・芭蕉さんの古典文化芸術への夢は、西行、漢詩の世界へのあこがれ、能楽をはじめとする日本美の融合と創造をめざし、それを発見するものであったと考えられる。古典芸術は、幽玄・花傳書の「花」の境地も芭蕉さんの「わび・さび・かるみ」の美意識の世界も共通する、社会文化基盤から派生するシンプルでオリジナリティのある独自の芸術美の世界の創造をめざしていた。つまり、古典の文化芸術では、日本の美意識は、幽玄・花の境地も「わび・さび・かるみ」、風流みやび、そして利休の茶道における美の世界も共通の文化的歴史環境の風土としての社会文化基盤（つまり、文化風土のインフラストラクチャーとしての文化ストックのフロー化と文化交流によるハード面とソフト面の融合による文化創造の中に存在する潜在能力の可能性を創出する働き）から派生するものであって、美術、芸能、舞台芸術、詩歌、連歌、和歌文学、茶道、華道、書道など各々個別のジャンルに分け區別して、再分類した上で、ミュージアムというハードの施設の中でそれらのソフト面を展示・演出をして見せていても、その本質を捉えて解釈したという実験の試みとはなりえないはずである。

2. “芭蕉さんの夢は世界をかけめぐる” アミュージアムの新構想

新構想は、私案では、以下（1）から（11）の部門のフェイズで構成されるものと捉えられている。そこで、まず、

- （1）伊賀の国全域の荘園文化社会にみられた平安・中世の雅の宮廷貴族の文学史跡・資料と芭蕉さんのあこがれ、
- （2）伊賀の世阿彌・観阿彌の能楽創座の地と日本芸能の春日若宮おん祭、そして芭蕉さんの古典文化芸術の美へのあこがれ、
- （3）京都への遊学生活と恩師北村季吟から教授さ

れた文化芸術の学問へのあこがれ、芭蕉さんと西行さんの吉野山奥の院へのいざないのみち、

- （4）奥の細道への旅への思いをかりたてる古典と奥ゆかしさへのいざないの未知への夢、
- （5）京都の嵯峨野・落柿舎での人的文化交流と俳諧創作芸術の美意識の新しい開拓への夢、
- （6）伊賀上野と江戸と上方を中心とする地域文化圏、そして江戸と上方と地方諸国に隆盛する商人・町衆の新興集団のつくりだしている、全国に広がる江戸時代の俳諧ネットワーク、そしてお茶席の場で展開されていた江戸時代の「座」という江戸期社交界のすがた、文化芸術のパトロネージュを支援・振興させた町衆の商業経済力、江戸期の文化産業の発達と爛熟へ、
- （7）元禄期を中心として活躍したニューアートの芭蕉さんと江戸文学・上文学、琳派芸術美術、俳画書画芸術の創作、その他芸ごとの「講・座」の家元制の形成と確立等、文化全般への影響、
- （8）旅に病んで芭蕉さんの『夢は枯れ野をかけめぐる』（長崎への旅へのいざない、そして大津の義仲寺と伊賀上野の愛染院への二つの墓に秘められる意味と芭蕉さんの遺言）、
- （9）芭蕉さんの夢は後世の人々に受け継がれ大きくはばたく～芭蕉さんの直弟子たちの働きと向井去来らによる芭蕉さんの遺志の実現と文学芸術作品の出版・普及・継承、
- （10）芭蕉さんの夢とその「志」を手本として、過去から現代そして未来に亘ってくりひろげられる「夢見る人々の文化創造の群像」～一茶・蕪村・子規・漱石・横光利一、伊賀上野城再興と俳聖殿の建立の夢に情熱を注いだ偉大な川崎克堂翁と速水太郎翁の郷土愛、そして書家・柳菴山のこころと、芸術の世界へ、
- （11）世界の三大詩聖人（シェクスピア、ゲーテ、松尾芭蕉さん）の文化芸術は、芭蕉さんの夢とあこがれをのせて、はるか現代芸術文化のインプレッシブな美の世界をもかけめぐっている。

以上のフェイズに提示しているように、「芭蕉さんの文化芸術の博物館」は、（1）から（11）にわたるフェイズで編成され総合的に再構築されている文化創造のセンターである。

しかしこれは、筆者の一つのアイディアにしかすぎない。夢を実現する為には、ミュージアム計画の公共的政策の意思決定のプロセスに「ミュージアム・マネージメント」が、市民参画と一緒に専門の学芸員・学術研究員等の主導型のプロジェクト政策立案と予算執行に基づいてなされるべきものである。

3. 新しいミュージアムづくりと地域創造

筆者の構想では、新しいミュージアムづくりの目的が、ニューアートの文化芸術の新分野の世界を切り拓いた「芭蕉さんの夢」を、現代未来に甦らせることであり、現代日本美の発見と創造をテーマとするものである。そのミュージアムづくりが、地域の文化創造に貢献するものとなり、「芭蕉さんの日本文化芸術の美と夢」の世界を、クライアントにミュージアム活動を通じて体験してもらい、人々の活動と運営に時間的交流（世代間の交流を含む）、時代的交流、空間的交流（地域と世界を結ぶ交流）を通じて、感動と共感を与える文化交流の機能を発揮して、博物館のもつ文化ストックのフロー化による「文化交流装置」と「文化インキュベーター装置」によって生成・発展される「非営利公益活動」としての「文化芸術産業」として、文化開発による地域振興の政策に役立てることを、第一のターゲットにするものである。

そしてそれには「豊かさの実感と体得」すなわち「心の糧としての日常の生活文化」への喜びと福祉社会ルネサンスの実現と、日本文化へのアイデンティティそのものへの夢の旅の探究という生涯学習活動を意図するものである。したがってこのミュージアムは、日本の伝統文化芸術と現代的な美の融合と発見の世界を一つのテーマにするものといってもよい。

筆者の構想している「新しい博物館」は、潜在的な「地域文化創造力」をひきだす広義の文化産業の育成・支援・開発のてだてとなりうるはずである。すなわち、その博物館のキーコンセプトは、『世界の芭蕉さんのドリームは世界にはばたき、そしてかけめぐるっていく』という考え方で捉えるものであり、その中に人々の心をなごませ、喜びの体験できる楽しい「アミューズメント・ミュージアム」というものを理念とする新しいタイプのものである。そしてその博物館活動づくりとその運営・経営、そしてミュージアムのソーシャルマーケティングを包摂する総合化、いわゆる「ミュージアム・マネジメント」は、IGAエコミューゼ構想の地域文化環境の景観全体の中における、まちと人づくりにかかわる創造活動によって、市民や住民の参加による意識改革、また若者たちの組織する新しい文化芸術系NPO（まちづくり、地域づくりの非営利の市民公益団体等、これには新しい法案上程と成立後に実現されるかもしれないが、いわゆる法人格の資格の得られる「新しい非営利法人」をも含むような団体）にも、中心におきながら、公共政策プロセスへの政策立案・意思決定への参画という活動の促進をねらった、新機軸のものであることが期待されるのである。

4. むすびにかえて

これまで考察してきたように、それらのミュージアムと市民NPOと行政によるゆるやかなパートナーシップに基づく協同と共生に支えられる「ミュージアム・マネジメント」は、地域づくり、まちづくり、

人づくりをめざす地域文化政策の役割をになうものである。このことからいえば、この新しい型の博物館活動と運営・経営は、地域の福祉社会におけるこれからの「ミュージアム文化」を地域創造に生かし、それを達成、推進するという「ミッションとしての本来の使命」を果たすものでなければならないのである。

最後に、日本の美の世界への意識は、欧米流のものではなく、シンプリシティーの一語につきる簡素な美・「しづさ」にあるといえよう。

（たかしまひろし / 神戸学院大学経済学部教授・経済学博士）

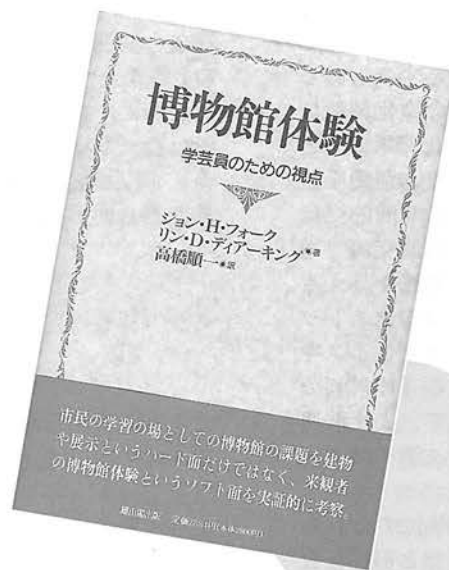


原稿募集!!

「侃々諤々」は、会員の皆さんが自由に意見を述べるためのコーナーです。奮ってご投稿下さい。

* 字数：3,600字程度

[
書 評
]



ジョン・H・フォーク、リン・D・ディアーキング著
(高橋順一訳)『博物館体験』雄山閣出版(1996年9月
発行)について

太田 隆

著者の紹介

本書は、米国のジョン・H・フォークとリン・D・ディアーキングとの共書である。

現在は民間会社のディレクター等の職にあるが、それぞれスミソニアン博物館の教育研究部門の経験やスミソニアン国立歴史博物館のプロジェクトに携わるなどの経歴の持ち主である。

利用者の視点での研究の書

近年、国内でも数多くの博物館が誕生しているにもかかわらず、利用者の博物館に対するイメージ、利用方法等はほとんど従前のままであり、博物館はあまり魅力的なものとは考えられていない。

また、ミュージアム・マネジメントの中でも重要な位置を占める「利用者の視点」での実証的な調査・研究も、国内では少ない状況にある。

本書は、米国での博物館利用者の総体的な博物館体験の研究の書であるが、人々はなぜ博物館を訪れるのか、博物館を訪れる際に事前に何を考え何を期待するのか、実際に入館してからどのような行動をとり何に期待し何に失望するのか、また博物館体験からどのような影響を受けるのかについて、また、利用者にとって博物館の魅力は、建物の雰囲気や展示の内容などのハード面ばかりでなく、講座やワークショップの内容、ミュージアム・グッズやレストランのメニュー、更に

は、ガードマンや展示解説員、ショップ、レストランの従業員等の「人」の対応、印象等も魅力に大きく影響することなどについて、調査データをもとに詳細に述べられている。

本書の実証的な調査・研究、多面的・具体的な提案は、日本の博物館でも十分当てはまるし大いに参考になると思う。

「利用者の視点」での調査・研究と博物館の魅力とは表裏一体的な関係にあり、このような研究が進むことは、博物館の魅力を増すことに大いに役立つと思われる。

国内でも「利用者の視点」に立った実証的な調査・研究が進むことを大いに期待したい。

本書は、研究の書であり一部難解な表現もあるが、一般の人でも博物館に興味のある人であれば、興味深くかつ十分理解できる内容である。

「利用者の視点」で考え、実証的なアプローチを旨とする当学会員の皆様に、是非ともご一読いただきたく紹介をいたします。

(おおた・たかし/新潟県三条市在住)

原稿募集!!

ミュージアム・マネジメントを考える上で参考になるとと思われる図書・論文をご紹介下さい。ジャンルは問いません。自著でも結構です。

* 字数：1,000字程度

会員からのメッセージ

〈個人会員・学生会員〉

◆伊藤由幸（札幌市青少年科学館）

理工系科学館として15年が過ぎ、新たに「環境・生命」分野を導入するため、増築を進めております。

体験展示を特徴とする当館としては、展示化が難しい分野でしたが、検討結果、大規模な疑似体験装置を導入することとし「バーチャリウム」と名付けました。ご期待下さい。

札幌の会員としては、なかなか研究会に参加できず残念です。

◆太田 隆（新潟県三条市在住）

これまでの博物館、特に歴史博物館は、一般の来館者にとっては、あまり居心地のよいものではなかった。

薄暗い展示室、難解で小さな文字の解説文、展示室内ではゆっくり休む場所も椅子さえもない。ほとんどの展示物はガラスケースの中に納められ、来館者はあくまでも静かに、ありがたく宝物らしきものを拝観することを求められていた。日本人の楽しみである写真を撮るなんてことは、もちろん許されない。来館者も館の職員もそれがあたりまえだと考えていた。

一般の来館者の立場にたった居心地の良い博物館、わかりやすい展示、興味のわく展示を考えながら、今年の3月まで博物館の企画・建設に携わってきました。

平成12年夏、新潟県長岡市に「県立歴史民俗文化館（歴史の博物館）」（仮称）が開館します。ご期待下さい。

当学会は、多くの実践的な研究部会があること、会員の皆様が様々な分野の方々であることが魅力だと思います。部会に参加するのを楽しみにしています。

◆奥野花代子（神奈川県立生命の星・地球博物館）

平成7年3月20日に開館し、1年を経過して各々の活動が軌道にのりはじめました。お寄せいただきましたご支援とご協力にあたためて厚くお礼申しあげます。

このたび、当館濱田隆士館長が、これからの新しい博物館のつながりやありかたを考えていこうと、小田原市をはじめ箱根町、真鶴町、南足柄市などの県西部地区にある博物館や美術館など45館ほどに呼びかけ、「神奈川県西部地域の博物館（園）長等意見交換会」を開催いたしました。会議では多種多様な博物館がある中で、お互いの共通点である「広報活動＝情報交換」と「学習支援活動＝生涯学習」を中心に話しあわれ、今後、どうマネージメントできるかネットワーク化へ向けて意見がまとまりました。

現在、2回目（平成9年1月予定）の開催準備を進めております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

◆尾内由美子（大阪ウォーターフロント開発(株)海遊館）

私は、もともと美術館の学芸員を目指していましたが、現在は水族館（博物館相当施設）内の図書室で、

司書として研究資料や蔵書整理等のアルバイトをしています。仕事柄、日本をはじめ海外の他園館の資料も目にする機会が多く、特に各館・各国での内容や取り組み姿勢の違いなどの点で、博物館での普及活動に関心を持つようになりました。今春からは、大学で再び社会教育学などの聴講をしながら仕事を続けさせていただいています。将来の博物館の機能や役割を考えながら、より充実した運営のベースとなる仕事ができるよう、J MMAを通じて、多くの方の意見をきいたり、考えたりしていきたいと思っています。わからないことばかりですが、よろしくお願いいたします。

◆小林宏道（多摩美術大学附属美術館）

現在、大学全体で進行中の新キャンパス計画にある美術館建設に向け、様々なテストケースを通して、大学にある美術館の可能性や、美術館運営と事業プログラムの在り方を探っています。現在、年数回の企画展に力を入れています。利用者も学生ばかりでなく、一般の来場者も増えています。最近、利用者と共に創造する、各種のワークショップやボランティア活動の導入にも着手していますが、参加者による自主的な活動が企画展終了後にも派生しており、今後の企画や展開の上でも楽しみです。

美術館が、大学内や大学と社会を結ぶ、コミュニティとネットワークの重要なターミナルとなることをめざし、様々なミュージアム・マネージメントの実践と実験を、利用者と共に推進し続けます。J MMAでもそれらの情報を、提供・交流して行きたいと考えています。

◆佐藤真理子（名古屋大学大学院生）

この夏、博物館学の集中講義でJ MMAの存在を知り、心躍る思いで入会しました。今はオーロラなど宇宙空間における自然現象の研究をしていますが、将来はサイエンスミュージアムづくりに関わりたいと思っています。科学で得られた結果だけではなく、そこに至る研究のプロセスや科学者の人間性に根ざした発想を伝える、研究現場と社会の架け橋となるようなミュージアムをイメージしています。J MMAの発足が私をわくわくさせたのは、ミュージアムに関わってゆくのにとってもいいフェーズなのではないか、と思わせてくれたところにあります。特に会報第1号の泉氏のミュージアムステート構想は共感を覚えました。J MMAを通して、似たものを目指すたくさんの方に出会えることを楽しみにしています。

先月初めて制度問題研究部会に出席させていただいて、みなさんそれぞれに意識が高く、抱える問題が多いことを知りました。今は実践を学べる場所を探している最中ですが、はやく現場を知るものとしてこの学会に参加したいと思っています。よろしくお願いいたします。

◆直田春夫（（財）関西情報センター）

〈『未完成博物館』があってもいい〉

ミュージアムをつくる「途中＝プロセス」そのものをミュージアム化したら面白い。つまり、いつまでも完成することなく、テーマやコンセプト、内容がいつの間にか遷り変わっていく。建物も大きくなったり小さくなったり、場所が移ったり、無くなったりもするミュージアム。そしてそこでは、何を発見しストックするか、何をどう表現し伝えるかなどについての議論や試行錯誤を人々が参加しながら形にしていくプロセスが展示されるというイメージ。したがって、ミュージアム自体が刻々成長していく。

こんなことを夢想している一介のシンクタンク研究者です。

◆田島雅子（愛媛県総合科学博物館）

人は、いろいろな体験を通して、その時の自分にぴったりのものを見つける。一方的に与えられるのではなく、自分自身で気づくことによって。それは、自分自身との新しい出会いでもある。そして、そこに存在する“もの”との関わりによって、その気づきは広がりをもつだろう。

“ミュージアム”も、気づきに出会える場所の一つである。そこに携わる者の一人として、訪れた人の気づきや発見を大切にし、どのように関わるができるか、模索していきたいと思う。

◆野田泰通（（財）奈良そごう美術館長）

〈学芸員に望むもの〉

平成9年度から博物館学芸員の養成内容が40年ぶりに改善されることになった。現在、学芸員の養成を行っている大学は230校、6,500人といわれ、各大学では養成内容の一層の改善、充実を図っている。

特に博物館機能の高度化や情報化の進展に対応して、「博物館学」に経営論や情報論を加え、現行の4単位を4科目6単位に増やしている。

生涯学習社会における社会教育指導者としての活躍が期待されるだけに、在学中にミュージアム・マネジメントをこれまで以上に学ぶことは大変意義深いものがある。JMMAの主張が実現したともいえよう。

あとは博物館実習で美的感覚を養うと共に、各地の博物館を見学し、運営に参加して、新しい博物館のあり方を探ってもらいたいと願っている。

◆増田喜昭（子どもの本専門店店主）

子どもの本屋を20年続けてきて、いま、子どもの遊びについて真剣に考えています。アメリカのチルドレンズミュージアムをみて、自分の中の想いが少しずつはじけています。

自分の街にふさわしいミュージアムのありかたのようなものを、子どもたちや街の人たちとのワークショップの中で考えていきたいと思っています。まだまだこれからなので、いろいろ学ばせてください。

◆南 博史（京都文化博物館）

京都文化博物館は、京都の歴史と文化を総合的に展示・紹介する施設として昭和63年10月に開館し、今年で丸8年が過ぎました。模型や映像を中心としたイメージ展示や、夜間開館など、多少この世界でも話題になったようでもあります。

さて私は、博物館の展示改訂のめどでもあるといわれる開館10年目を控え、一昨年英国に博物館調査に行ってきました。英国でのいわゆるミュージアム・エデュケーションの現状とその理念の下にある新しい展示方法を見たかったからです。そして、その報告を京都文化博物館の研究紀要にまとめたのですが、これをきっかけに日本ミュージアム・マネジメント学会に参加させていただくことになりました。しかし、まだまだ勉強不足であり、先学諸氏の応援をよろしくお願いします。

◆葭谷温子（（財）馬事文化財団/馬の博物館）

〈馬の博物館〉は横浜根岸の小高い丘、慶応3年から昭和18年まで競馬が行われていた競馬場跡地の一部に開館し、来年20周年を迎えます。これまで馬に関する自然史・歴史・民俗・美術工芸・競馬など、様々な分野の展示を行ってきました。最近増えつつある専門博物館の立場からミュージアム・マネジメントに関わっていきたいと思いますが、情報伝達の手段が日々変わりつつある現代で、展示方法、情報提供など、博物館も変化を余儀なくされていく中、個々の博物館が独自性を失わず、これからの社会と、如何につながっていけるかを考えたいと思います。



〈法人会員〉

◆松下電器産業（株）

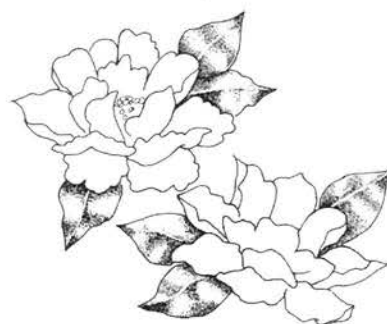
昭和52年、国立民族学博物館のビデオテークシステムを機に、当社では博物館の各種情報提供システムに取り組んで参りました。メディア自体が資料である映像・画像等データベースをはじめ、理解促進の為の解説映像・シミュレーション、心的インプレッションや集合研修の為の大型映像、そして近年ではネットワークを介し、博物館の情報は時間的、空間的広がり呈して来つつあることは既に皆様のご承知の通りであり、当社も、いくつかの博物館と共にマルチメディアネットワークシステムの可能性を実地で検分してゆく機会に恵まれました。

マルチメディアやネットワークというものが、博物館の情報提供や利用法、ひいては運営面にも確実に影響を及ぼしてゆく事は今後必須と見られます。しかし電子メディアがそれ単体で先走りすることなく、あくまでも全体の中でのバランスのとれた役割を果たすべきと考えております。その為にも博物館という機能体で扱われる情報全てを広義の「マルチメディア」と捉え、その上で電子メディア（狭義のマルチメディア）のあり方や可能性を踏まえ、実際に運用できるシステムとしてご提供できればと思っております。

展示・教育・普及の各面で、従来のマスの支援から個への支援への移行の必要性が高まり、それをサポートする伝達手段やマーケティングやマネジメントなどの手法の導入を考える場合、私どもが従来異分野で手がけてきたシステムが活用できる可能性は多分にあると存じます。民間企業において戦略手段として用いられてきたデータベースマーケティングをはじめとする手法、およびこれらをインターネット等の伝達システムと複合させる等、後方の支援システムとして活用できるのではと考えます。しかしこれらも博物館の機能や性格を踏まえた上で、どこまで適用出来るのか見極めができてこそ有効なシステムとなりうると思っております。

今日の技術革新は日進月歩で、日々新たな要素技術が生まれ出ております。しかしテクノロジーは適正な利用技術の上にこそ成り立つものであり、J M M Aの皆様より幅広くご意見ご指導を賜りたいと存じております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

松下電器産業(株)官公需営業本部 システム推進部主任
宇山葉子 E-mail pan16729@pas.mei.co.jp



原稿募集!!

近況報告や、ミュージアムに関するご意見、情報、PR等、会員の方々へお知らせしたいことがありましたら、お気軽にどうぞ。

* 個人会員・学生会員：200字程度
法人会員：600字程度

研究部会の開催予定一覧

●現在予定が分かっているものだけを、日程順に掲載しています。他の研究部会については、追ってお知らせします。

研究部会	日 時	テーマ	場 所
ミュージアム文化 研究部会	1月11日(土) 12日(日)	「博物館と街づくり」 「環境をテーマとした新しい博物館」 ※日時・場所等は別紙をご覧ください。東京方面からのツアーも企画中です。	かわらミュージアム(近江八幡) 滋賀県立琵琶湖博物館
制度問題研究部会	1月25日(土) 14:00～	報告とディスカッション「イギリスの博物館制度と人材養成 (仮)」(報告者：竹内有理さん)	国立科学博物館

◆当学会の会員であればどなたでも、すべての部会に参加することができます。参加費等は特に必要ありません。

◆参加を希望される方は、別添の事務連絡票又は電話にて、学会事務局までお申し込み下さい。

INFORMATION

●好評発売中

大堀哲ほか監修『ミュージアム・マネジメント：博物館運営の方法と実践』（東京堂出版、編集協力：日本ミュージアム・マネジメント学会）が9月末に発売になりました。これまでにない実践の書としてご好評をいただいているようで、売れ行きも順調のようです。会員の方々には、専用の申込みハガキをお配りしておりますが、ご購入の上、広くご推薦下さいますようお願い申し上げます。

●第2回大会の開催

本誌P.2でもお知らせしておりますが、平成9年3月8日(土)、9日(日)の2日間にわたって、当学会の第2回大会が開催されます。開催場所は、新宿にある国立科学博物館分館（研修研究館）に決定いたしました。第1回を上回る充実した大会となるよう役員はじめ事務局担当者で準備を進めております。会員の皆様方におかれましても、お一人でも多くご参加下さり、大会の成功に向けてご協力下さいますようお願い申し上げます。なお、遠方より参加される方のために、宿泊場所をご紹介します予定です。詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

●研究紀要の発行について

10月31日をもって投稿の受付を締め切らせていただきました。論文と実践報告を合わせて十数件の申込みがありました。この会報がお手元に届く頃には原稿が出揃う予定です。（執筆者の方はお疲れさまでした。）研究紀要編集委員会では、3月の発行に向け、採用原稿の決定等、編集作業を進めてまいります。ご期待下さい。

●会員募集

会員の登録件数が350件を超えました。学会活動をさらに充実したものにするためにも、できるだけ多くの方々に会員になっていただきたく、いろいろな機会を利用して積極的に当学会をご紹介しますようお願い申し上げます。特に、各種集会等で入会案内書類を配布いただけると幸いです。入会案内書類については

事務局までご請求下さい。（平成7年度同様、入会のための推薦者は必要ありません。）

●原稿募集

本誌は、会員の皆様がつくる会報です。个性的かつ独創的な原稿を事務局までお寄せ下さい。

編集後記

師走になり、いちだんと寒さが厳しくなってきました。収穫の秋が終わって、各地では新酒の仕込みなどもはじまっているようです。

昔から、「新しい酒は、新しい皮袋にいれなければならない」といわれます。古くなってしまった入れ物に新酒をいれたのでは、丹精込めてつくったせっかくのお酒がだいなしになってしまいます。香りや風味が命である新酒には、その個性にあった新しい入れ物を用意しなければならないのです。いろいろな人の共同作業によってはじめておいしいお酒ができるということでしょう。

ミュージアムに関わる人間も、この酒づくりから多くのことを学ぶことができます。われわれはとすると、展示やイベントの内容にこだわるあまり、食堂やショップ、トイレ、駐車場などのサービス面をおろそかにしてしまうことがあります。酒造りの教訓を胸に、いろいろな方面に気を配るようところがたいものです。そういう日々の働きかけこそがミュージアム・マネジメントの第一歩なのではないかと考えております。

副会長、編集担当理事：江ノ島水族館長 堀 由紀子

JMMA会報 No.3 (vol.1 no.3)

発行日/1996年12月20日

発行/日本ミュージアム・マネジメント学会

事務局 国立科学博物館教育部企画課

〒110 東京都台東区上野公園7-20

TEL 03-5814-9876 FAX 03-5814-9898

デザイン・印刷・製本/(株)ミュゼ